

信卷所引論註の文について

大神 栄 治

『教行信証』信卷の主題は言うまでもなく信心の課題であるが、その信心を親鸞は別序冒頭に「夫れ以みれば、信樂を獲得することは如来選択の願心自り発起す、真心を開闡することは大聖矜哀の善巧従り顕彰せり。」(定本一・九五頁)と述べる。つまり親鸞の言う信心とは、自らの内にあるもの、自らが起こしていくべきものとしてあるものではなく、如来選択の願心と大聖矜哀の善巧によって「獲得」すべきものである。このことは重要な問題提起である。一般に仏教では、行を行じることが因となり、その行によって得る悟りが果となる。その行を行じるとき菩提心を起こすということが要求されるが、発菩提心ということも「信」に位置づけるより、むしろ行に関わる概念である。つまり、発菩提心ということの具体的な在り方は、出家という行であり、また発菩提心ということそのものが生活を仏陀の悟りの方向へ向けるということ、戒を保つという行となる。したがって発菩提心という概念は、行の概念に属する。その意味では、「信」ということは、仏教に関わるとき問うまでもない自明の前提である。むしろ問題となるのは、発菩提心に基づく行証である。しかし親鸞が言う信心は、「斯の心即ち是れ念仏往生の願より出でたり」(定本一・九六頁)と述べるように、念仏往生を遂げる「証大涅槃の真因」としての信心である。したがって仏道が成立する因として「信」が位置づけられている。この意味において信心とは、どこ

までも本願の念仏に就いての信心である。しかもその念仏に就く信心は「証大涅槃の真因」といわれていることにおいて、仏道が成立するかしないかという根本的な事柄と関わることとしてある。親鸞は信卷において、経文に続いて曇鸞の『論註』下巻讃嘆門釈の問答を釈文の最初に取り挙げている。このことは、経文において教説された信心がどのような意義を持つものであり、また衆生にどのように領受されていくのか、ということを中心とした提示をしていくことで明らかにしていくこととする親鸞の意図を示している。このことを明らかにしていくとき、思索の中心に据えるのが「建言我一心」の一句である。

この一心についてはすでに行巻に「無碍光如来を念じて安樂に生まれんと願ず。心心相続して他想間雜なし」(定本一・三四頁)という文が引かれている。この文は、

如何が讃嘆する。謂く、彼の如来の名を称す。彼の如来の光明智相の如く、彼の名義の如く、実の如く修行し相応せんと欲うが故にと。(定本一・三五頁)

という讃嘆門の言葉と呼応して、念仏相続、称名憶念の相を顕すものである。「心心相続して他想間雜」のないもの、それが「如実修行相応」であり、このような念仏の外に信はなく、信なくして如実の念仏はない。行巻における『論註』の引文は、このようになことを明らかにしている。この行巻の讃嘆門釈の引文で注意しなければならないのは、「称」の字の頭註である。この字訓で「称」の字の意味を「銓」とする。「はかり」とは、「軽重を知る」用きであり、そのことによって物事を是正し、均等にするものである。また『一念多念文意』に、このことの意味を

称は御なをとなうるとなり、また称は、はかりということころ

なり、はかりというは、もののほどをさだむことなり、名号を称すること、とこえひとこえ、きくひとたがうところ一念もなければ、実報土へうまるともうすころなり

(定本三和文篇・一五一頁)

と述べている。したがって「称」には「もののほどをさだ」めるという用きがあり、このことによって「称」と「名」と相い称うものとして、「御なをとなうる」という具体性において、名義相応の意義を明らかにするものである。

それでは何故称名において「もののほどをさだ」められるのだろうか。また「もののほどをさだ」められるということは何を意味するのだろうか。このことが信巻に引かれる「論註」の文の意義である。それは

称彼如来名とは、謂く無碍光如来の名を称する也。如彼如来光明智相とは、仏の光明は是れ智慧の相也。此の光明十方世界を照らすに障碍有ること無し。能く十方衆生の無明の黒闇を除く。日月珠光の但室穴の中の闇を破するが如きには非ざる也。如彼名義欲如実修行相応は、彼の無碍光如来の名号能く衆生の一切の無明を破す。能く衆生の一切の志願を満てたまう。

(定本一・一〇〇頁)

と述べられるように、行それ自体の用きは円満しているにも関わらず、「然るに称名憶念有れども、無明由存して所願を満てざるはいかんとならば」(同前)という問いが起くるのである。

この「論註」の問答は、「我一心」を「如彼名義欲如実修行相応」といわれる「欲」を受けて起こされてくる。つまり、「尽十方無碍光如来」という用きをもつ如来の名に「相応」することを「欲」するがゆえに起こされてくる問いである。その意味におい

てこの問いは、称名が破闇満願の用きをもつ如来の名と相応するということの道理を認識するところに起こされる問いである。何故このような疑問が出てくるのか。このことに對して「如彼名義欲如実修行相応」という世親の指示を手掛かりとして、その理由を「如実修行せざると、名義と相応せざるに由るが故也」。(同前)と確認する。「称名憶念」しながら何故無明が残っていくのか、という問いに對して「不如実修行」「名義不相応」ということがあるからであると言い、その内実を、「如何が不如実修行と名義不相応と為る。謂く如来は是実相の身なり、是れ物の為の身なりと知らざるなり」(同前)と述べるように、まず「実相身」「為物身」の「不知」という問題として明らかにしていくのである。この「不知」と言われていることの性格は、称名憶念に出遇い得たとする如来の実体化と、衆生の自己了解の独断に對する否定である。この意味において、「不知」ということは、まさに衆生の根源的な無明の問題である。そしてこのような「不知如来」の根拠として、次に「三不信」の問題を取り挙げるのである。その「三不信」とは、「信心不淳」「信心不一」「信心不相統」(同前)である。このことによって、信心が決定しないこと。決定しないことにおいて信心が相統しない。信心が相統しないから決定の信を得ることができない。決定の信を得ることができないから、その信は「不淳」であるという。このように信心を「得」の問題として提起するということは、前に述べたように、「信」ということが仏道の根幹に関わるからである。仏道の根幹に関わるということは、仏道に関わる衆生の、主体の成立の根源に関わる問題としてある。

その獲得すべき信、自身の成立根拠を「建言我一心」という。